論文の和文要旨

論文題目	本居宣長の古典解釈研究―和歌解釈を通して
氏名	藤井　嘉章

本研究は、本居宣長が古典テクストをいかに読もうとしたのかを、彼の和歌解釈の実例に沿って分析することで、その思考様式の解明を行おうとするものである。本論は全六章に加え附章一章で構成される。

第一章「『古今集遠鏡』と本居宣長の歌論」では、まず「もののあはれ」を『古今集遠鏡』における「あはれ」の訳出の分析に沿って再考した。「もののあはれ論」は理論的な水準で議論されると、日本的共同性を構成する概念として捉えられる傾向(百川敬仁『内なる宣長』東京大学出版会・一九八七年など)にある。一方で『古今集遠鏡』における「あはれ」の訳出を見ると、「アヽハレ」や「アヽ」のように「歎息」そのものとして訳出されていることがわかり、これは「もののあはれ論」を共同性の構成とは反対に、個別の感情の動きとその表出に関わるものとして捉える視座を示しており（前掲菅野がこのような「もののあはれ論」を提起する)、その二つの位相を共に認めることを主張した。また宣長の和歌解釈態度に関する先行研究について、『美濃の家づと』を対象とした研究も踏まえながら、宣長が論理的一貫性に過度に固執するという評価が一般的であるを与えていることを確認した。その上で、『古今集遠鏡』における「あはれ」の訳出を調査した。その結果、それぞれの和歌における「あはれ」の意味内容や訳文上の対応関係に関する工夫などから、様々な訳出を行い、訳出上の柔軟性を有していることを確認した。

第二章「本居宣長の俗語訳論―徂徠・景山の系譜から―」では、『古今集遠鏡』が古典解釈を翻訳という形式で行う実践であるという立場から、宣長が自らの古典解釈に翻訳という方法を採用した意義を、中国古典の俗語訳に関する荻生徂徠と堀景山の系譜を媒介として探求した。徂徠は古代中国語の中国語発音による直読直解が可能であると考えており、中国古典の日本俗語への翻訳を初学者のための便宜的方法に止めた。一方で景山は中国語の直読直解は「天性」の異なる日本人には不可能であり、日本俗語への翻訳が日本人の中国古典読解のために不可欠な方法であるとの見解を持っていた。徂徠、景山の議論を受けて宣長が、徂徠派による中国古典の直読直解は、表面上中国語発音をしながらも心中では翻訳を行っているに過ぎないと考え、中国古典の理解には景山同様の考えを持っていたことを示した。さらに、宣長における言語と古典世界との関係の認識を、徂徠のそれと比較することで、徂徠にとって理想とする古典世界としての「先王の道」は最終的に言語の媒介なく振舞いとして合一すべき世界であったが、宣長にとっての古典世界である「古の道」は言語そのもの

であったことを指摘した。最終的に、中国古典読解における日本俗語への翻訳の必要性、古典世界を言語として把握する態度に加えて、『遠鏡』「はしがき」での俗語訳を通して初めて古言を体得し得るという主張から、日本古典読解に関して古言を古言で理解するというのは宣長が批判した徂徠派の中国古典の直読直解と同義であり、宣長にとっては日本古典の俗語訳は初学者への便宜的方法に止まらず古言を理解するための不可欠な方法であることを示した

第三章「『草庵集玉箒』における本歌取歌解釈の諸相」では、『草庵集玉箒』における本歌取歌解釈に焦点を絞り、その宣長の解釈の諸相を析出した。その際、伝統的な歌学書、特に頓阿『愚問賢注』の提示する本歌の取り方に関する枠組み、及びその現代における代表的な解釈である久保田淳「本歌取の意味と機能」(『中世和歌史の研究』明治書院・一九九三年)を主な参照軸にしながら、宣長が本歌取歌を解釈する評釈中に用いる言葉や、本歌取歌一首の意味理解の実際に沿って、本歌取歌解釈の分析的視点を再定式化した。その結果、

(A) 本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取
(B) 本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取
(C) 本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取
(D) 本歌に応和する本歌取
(E) 心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取
(F) 本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取
(G) 本歌を二首取る本歌取
(H) 縁語的連想による本歌取
(I) 本歌の趣向を変えない本歌取

の計九種の本歌取歌解釈の分析的視点を析出した。それらの解釈は、基本的には伝統的な歌学書に即した本歌取解釈を行う一方で、宣長に特徴的な本歌取歌の解釈をも示していることを指摘した。

第四章「『新古今集美濃の家づと』における本歌取歌解釈の諸相」では、第三章と同様の方法論に基づき、『新古今集美濃の家づと』において、宣長の本歌取歌解釈の諸相を分析した。その結果、第三章で上げた分析的視点のうち、(E) 心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取が見いだされず、また (I) 本歌の趣向を変えない本歌取を『新古今集美濃の家づと』評釈においては「本歌の詩句と変わらない本歌取」と捉えることが適切であることを示した一方で、新たに

(J) 摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取

を見出した。その上で、宣長の具体的な古典解釈のあり方から彼の思考様式を導くために、

本歌取歌解釈において「心を取る本歌取」と「詞を取る本歌取」の対立があることを確認した上で、宣長の本歌取解釈態度を分析した。その結果、宣長は「心を取る本歌取」と「詞を取る本歌取」両者の解釈を共に認めており、宣長の古典解釈態度が一般に規定されるような過度な論理的一貫性への拘りという性格規定とは別の、解釈の柔軟性をも有していることを示した。

第五章「宣長手沢本『新古今和歌集』書入本歌と『美濃の家づと』における本歌認定の相違」では、『草庵集玉箒』と『新古今集美濃の家づと』との執筆年代の中間期に行われた宣長の新古今和歌集講義において用いられたと考えられる、本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本『新古今和歌集』中、『美濃』で本歌取歌として解釈された新古今歌に関する書入の調査分析（「附章」として掲載）に基づき、宣長手沢本『新古今和歌集』宣長書入における本歌と、契沖による『新古今和歌集』への書入」、及び『新古今集美濃の家づと』の本歌とが相違する新古今歌に焦点を当て、事前に析出した本歌取歌解釈の枠組みを参照しながら分析を行った。その結果、従前の枠組みに従えば、(C) 本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取、(H) 縁語的連想による本歌取、(J) 摂取されていない本歌の詞を読み込む本歌取として読み込むことが、宣長の本歌取歌解釈の中で傾向として浮かび上がることを示すことができた。

第六章「本居宣長における評語「縁」と「よせ」の輪郭―宣長の縁語解釈の解明に向けて」では、第五章で明らかにした宣長の（H）縁語的連想による本歌取への傾向性と、また従前指摘されてきた宣長における縁語の重視という観点を踏まえた上で、宣長の評釈中にあらわれる「縁」と「よせ」の用例分析を行い、その使用法の輪郭を跡付けることを試みた。そこでは小野美智子「縁語の認定」（『文芸研究』第一五六集・二〇〇三年）に基づき

（1）語同士が同一の連想の表象であること
（2a）同音異義語の掛詞が介在すること
（2b）同一語異義の掛詞が介在すること
（3）掛詞の二重の意味が物象叙述と心象叙述とに分かれ、物象叙述の系列が縁語関係を構成すること
（4）語同士が論理的文脈の中に置かれていないこと

という縁語認定の基準を参照軸としながら、「縁」・「よせ」の各語を用いることで宣長が示そうとする事柄を探った。結果として、

(一)「縁」が（1）～（4）に適う関係を指すもの
(二)「縁」が一首の趣向となるもの
(三)「縁」が一首の趣向とならないもの
(四)「縁」が（1）～（3）に適うが、（4）には適わない関係を指すもの

（五）「よせ」が（1）～（3）に適うが、（4）には適わない関係を指すもの
（六）「よせ」が（1）、（2）と（4）に適うが、（3）には適わない関係を指すもの
（七）「よせ」が縁語認定の基準には適わないが、和歌的世界の場面設定における必然的な繋がりを示すもの
（八）「よせ」が一首を越えて想定されるもの

と言った諸相を宣長の用法のうちに見出した。

最後に附章として「本居宣長手沢本『新古今和歌集』における本歌書入」を付した。これは『新古今集美濃の家づと』本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本『新古今和歌集』において本歌が指摘されている一七二首の新古今歌に対する書入を調査・翻刻したものである。その結果、二二〇の書入項目が見出された中で、一九〇項目が契沖『新古今和歌集』書入の内容と一致する一方で、その内の四五項目が『新古今集美濃の家づと』の注釈では採用されていないことが明らかになった。第五章の分析は、この調査に基づき行われている。